

自治体における高齢化社会対策

岡村 駿

一 はじめに

ミナト横浜の再生と活性化をかけて、都心部と港湾機能の拡充を目指した二二世紀への街づくり「みなとみらい21」(通称MM21)事業の起工式が、西区の三菱重工跡地で行なわれた。一九八三年一月八日。この日、私は、カメラマンの勝山泰佑氏と西・中両区の街を歩いてみた。MM21計画は、昭和七十五年(西暦二〇〇〇年)に開発を完了させる予定で新規埋め立て地を含む一八六haの地域に、美術館や帆船「日本丸」をとりこんだ公園、国際機関の誘致など、夢多きビッグプロジェクトである。だが、ちょうど、この事業の進捗にあわせて横浜の高

齢化も進展し、現在、全市平均六・五%の高齢化率(総人口に占める六五歳以上高齢者の割合)が、西暦二〇〇〇年時に一五%、西・中両区では二〇%をゆうに超えるという予測だ。全市的にみれば、その数は現在の三倍、西・中両区では区民の四人に一人が老人ということになる。片や夢のある計画であり、他方は、いまだ経験したことのない未知の社会が出現する。これを、どのように調和させるのか、私たちは、この十一月八日という記念すべき日に、すでにその半分、もう一〇%前後の高齢化地域となった西・中両区の現況を、自分たちの眼で確かめることにした。

難しい話はこれ位にして、まず、街に

出て、そこで見かけるごく「普通の老人」たちの姿を追ってみよう。高齢化の問題は、一般的には社会の平均年齢があがって、街に老人たちがあふれることであり、それは、なにも全てが明日の話ではなく、横浜の都心部では、もうすでに始まっていることなのだから……。

二 街で見かける「普通の老人」たち

私たちの高齢化への歩みは山下公園から始まった。観光客の多いなかで、「海が見えるこの場所が好き」という横浜在住の八七歳の女性は、五〇代半ばの嫁さんにつき添われて公園のベンチに座ってい

- 一 はじめに
- 二 街で見かける「普通の老人」たち
- 三 落ち着きのある心優しい社会へ
- 四 横浜の高齢化はどのように進むのか
- 五 時間資産の活用と健康上の問題
- 六 惰性的な日常性にひとつの転機を

た。「足が達者だから良く来るんです」という言葉に黙ってうなづいていた。なにか遠い昔の思い出につながる場所なのかも知れない。若いカップルの多くは、ここから港の見える丘公園、そして外ら墓地の横を通過して元町へと下るが、その横の公園には、木陰でスケッチする三人のお年寄りグループと、「天気が良いれば必ず毎日三〇分は来る」という杖を持った七〇代の男性が、ポツンと一人ベンチに座っていた。幼児をつれた三〇代女性も、大きな木の下で読書をしている。ここは、日光浴と森林浴の両方を楽しめる静かな穴場だが、談笑しながら絵筆を進めるグループや幼児を連れだした散歩にくらべて、一人きりの姿は、ちよつぱり淋

しげで対照的。

大きな鉢植えの松の手入れ方を教えてくれたY植木の職人さんは五〇代半ば。正月、卒業式用にリースで貸出すそうだが、長いハサミで、ひとつひとつの枝を左右から確かめつつ丁寧に剪定している。メガネのレンズの厚さが、陽の光でとてもやわらかく見えた。若者の生活リズムやテンポでは、ほとんど不可能な位、ゆったりとした作業である。そう言えば、交差点の信号待ちで気になったことは、横浜の都心部で、自転車に乗っている人は中高年者に多く、若い人は、ほとんど今はやりのオートバイか車だ。これも、現代社会の生活リズムと関連しているのかも知れない。自転車のスピードを制御できなくなれば、頼るのは自らの足であり、杖も必要になる訳だ。

表通りから脇道に入ると、横丁で孫の遊び相手をしていた六〇代の女性いわく「なんで写真なんか撮るの。もっと若い人を撮れば良いのに」「みんな結局はそうなるよ」といったら「あんたワカッテルネ、オバアさんでも良いんだ」。六〇代の女性では、まだ結構歳のことを気にする。だが、八〇代ともなれば「もう一杯で、随分おつりが来ちゃっているの」。垣根の手入れをしていた八五歳の男性は「どうせ素人がやるんだから大したことはいらない。それに、本当に生きているというだけで、だらしが無いよ」といながらも出来映えは立派なものだ。健康老人の家での主な役割は、女性が買物や孫の世話、男性では庭の手入れや寄り合い・慶弔への出席などが一般的。元町のバス停前で、赤い手帳と杖を手にした二人のオバアちゃんがしゃがんでいる。「世の中良くなったけれど、私たちが家に居ると邪魔なので、友だちと老人ホーム（福祉センター）に行く処」「この人、初めてなので、私が案内するんだ」といった先達のお歳は八八歳。

麦田のトンネルを越えた車庫跡の公園では、中区老人クラブ連合会主催のゲートボール大会。競技に没頭する人、大声で声援する人、焚火を囲みながら話す人、いずれも胸にかけた赤や青のゼッケンの数字が鮮やかだった。時間単位でコートを貸すらしく、「あと五分だよ」の声で勝負のケリをつけ、つぎのグループとかわる。時には、場所の取り合いでいさかきもおこるそうだ。山元町入口の小さなお好焼屋。並一四〇円、玉子入り二〇〇円、肉・玉子入りだと二四〇円。オデン一皿二五〇円という値段。七〇代女性二人が来店し、「ここのおいしいんだよ」「オデン持って行きな、私がおごるよ」「お血よごして悪いけど、私は、お好焼にオデン。焼チクワとハンペン、それにガンモが良いな」。食べながら「一旦那、緑区の病院に入院しちゃったんだって。それじゃ、あまり見舞にも行けず淋しくなるね」「それでも帰って来れば良いけれど」と、食欲の割には深刻な話。

この山元町周辺は、横浜のダウンタウン。物価は安く、大晦日には港のボートも聞こえるし、旧い下町のたたずまいが随所に残っている庶民の街だ。気軽に声をかけてくれる。「この道の方が静かで、お店もあつて良いよ。昔は、一日一〇台車を通る位だったのが、こんなに立派になって、あまり立派になりすぎてやだね」「横浜は好きですか」「好き嫌いじゃないよ、永く住んでみなければ土地の良さはわからない。そうなればもう動くことは出来ないし、困ったもんだね」。教えられた旧道には、「養沢寺久保本通り二〇時速厳守」といった警察・自治会連名の看板が立っている。近くに小学校があるからだ。しかし、これ位のペースがお年寄りにも、気ぜわしくなく、安心かつ納得できる車の速度なのだろう。昼時なので、白い帽子とマスクから、眼しか見えない子供たちが給食の用意をしている。パンの係、牛乳の係、食器の係、お菜のバケツをもつ子供、みな二人一組で列をなして歩く。かん高い声もなごやかだ。門前の壁に腰を押しつけ、ヒザに手をおいてジッと子供たちの動く姿を見つめている七七歳の男性。「孫が居る訳ではないが、子供は無心で動いている。年ばかり取って、大人はつまらぬことを考えるから」「子供の方が天真爛漫で良いね。夢なんて、くたびれてみないとわからない。若い時はどんどんやらなきゃ。くたびれてみるとワカルヨ」「でも、子供を見て良いなと思うようになってたら人間は駄目になったんだよ、もうおしまいだね、くやしけど仕方ないよ」といってニコッと笑った。その時の眼は生き生きとして、とても優しく輝いていたのが印象的だった。

回位ずつこうして集まり、箱根や尾瀬などあちこち廻って、今日が三三回目の「歩こう会」。横浜の身近かな名所を発見し、大仏記念館、ゲーテ座、根岸公園と歩き、これから三溪園に行つて菊花展を見、夜は、伊勢佐木のお店で、二次会、三次会をする予定。職域と地域のふたつが重なつて生まれたなごやかで、楽しいグループ。四〇代後半の女性たちの年に数度の息抜きの場で、時には、ご主人や子供、八三歳のお年寄りなど家族くみで参加することもあるそうだ。

三——落ち着きのある心優しい社会へ

横浜は坂の多い街。お年寄りの買物や足の不自由な人には大変だ。休み休み歩かねばならない。「買物に行つてくれる人はいるんだけど、食べるものは、やはり自分で選ばないと」「足が悪いんですか」「リニューマチじゃなく、ちよつとこゝろんでヒザを打つたら、そのあと調子悪いんだ。若ければすぐ治るけど、年をとるとどうもね」「腰が悪くなつて、それをかばっている内にヒザにきた」という人もいた。

雨の日など、コートを着て、右手に杖、左手にカサと荷物では、どうしても身体が縮まる思いだ。だから、雨や風の

強い日に、老人たちが外出を避けるのは当然のこと。それでもさつそうと歩く高齢者は強い老人たち。キチツとした服装で、姿勢を正し、胸には大底所履を示す立派なパッチと万年筆、それにシヤレたカバンをさげた熟年男性が目立つ。これに反して、ひとりの風太郎氏（自由労務

者）は、社会的にも弱い立場にある老人。掃部山公園のベンチで、子供たちの遊びを見ながら、世帯道具のつまつたバッグから、パンと牛乳を取り出し、手慣れた様子でカミノリを使い、飲口をつくつて遅い食事を始めた。それを終えると、ゴミ箱から新聞を探し、横になつて読む。読み終えれば新しいのに替えて各紙目を通すから、最近のニュースについては博学だ。ここは、県の音楽堂の裏。振り返れば港が見える。MM21のシンボルゾーンは、すぐ目の下だ。

また、ある往来では、初老の大工が酔つてくだを巻いている。「腕は良くて、一日一万五千元は稼ぐ」そうだが、一人住まいでアル中気味。スパーのビニール袋を下げた同じ一人暮らし老人の食事も味気無いものだ。栄養のバランスよりは、調理に手間のかからぬインスタント食品か、パック商品で済ませることが多い。野毛山動物園で「まだ六七歳」と胸を張つて答えた男性は、孫の手を引いていたが、その横には、老夫婦だけで来

て、静かに子供たちの騒ぐ姿を見ている人もいる。この利用者は、幼児や子供と老夫婦だけではなさそうだ。

ともあれ昼食時間も過ぎたので、犬の散歩や買物、そして庭に出たり、午後の仕事を始める老人たちに続々と逢い始める。

ピタツと正座して板金細工をする七四歳の職人さん。太つてはいるが、曲尺を使う時にメガネもいらぬし、背筋がピシツと伸びている。通りかかる地域の人への挨拶を忘れずに「今、息子が跡を継いでいるが、時々手伝いに行く。でも、こんなはずう体がデカくなつちや屋根の上での仕事は無理。昔は、ピョンピョン歩けたのに」。車の多い主要道に面した畳屋さんにも、古いカマドで厚揚げをつくる豆腐屋さんでも、また小さな靴屋さん、染物と貸衣裳のお店などで、老人の働く姿がみられる。住宅地のなかにポツンとある古い駄菓子屋。あめ玉、ふ菓子、イカ、ラムネ、鉄砲などが並ぶ。大正六年横浜に転入し、もう三三年も子供たちとつきあつてきた九二歳の男性は「ふとんに入っているが、オシッコも自分で行ける」と自慢する嫁が、この店を引き継いでいくことにひとつの意味を見出しているようだ。「お元氣ですか」「どなたさんでしたっけ」「通りがかりの者ですがお大事に」「ありがとう」こ

んな少ない対話でも気持ちには通じる。二時半から三時頃は子供の下校時間。この時間には、老人たちも散歩や外出から戻つて、そろそろ買物に出る頃だ。私たちは、藤棚の商店街に出かけた。ちょうど買物時間にあつた。ジャンパー、セーター、着物、チャンチャンコなど上着はまらちだが、足下のハキモノは先づきの丸い平たい靴か、歩き易いスリッパやビニール製の草履。この時間帯なら、お年寄りにもゆつくり買物ができるのであるうか、その数は、すさまじいものだ。是非一度、ご自分の眼で確かめてもらいたいと思う。高齢化率一五％とは、この五割増しの数字なのだから。ともあれ、三時半頃には皆引きあげていく。そこで普通の主婦層と交替し、それ以降になれば共働きや勤め帰りの若い買物客が増え、お店の方でも殺気だつてくるのだらう。老人たちは、自分たちの利用すべき場所がどこで、便利な時間帯はいつか、といったことを充分知つた上で街を使つていくようだ。

このようにして私たちは、横浜高齢化ウォーキングの第一日目を終えた。その日から、あちこちの街を歩いて、いくつものことを発見した。たとえば、老人と逢うためには、表通りからちよつと離れた裏道を歩くと良い。それも、舗装が少

し痛んで穴ボコが処々あいていれば上出来だ。理由は、騒々しく、わずらわしい車を避けるからで「現役を退いた二流の感じ」がする道路に入るのが、横道を選ぶ際の大事な嗅覚だ。そうすれば、八三歳の女性がチワワの背中に赤い服を着せて散歩中、「ほら、見合写真を撮ってくれるってよ。私の方は、長生きし過ぎて困ります。犬の方でかげんして歩いてくれるんだから」というような会話もできるだろう。

また、敷地の広い上等な住宅地の道路では、ほとんど老人の姿が見られない。間取りも多く、老人の憩う部屋と陽当りの良い庭が用意されているのかも知れない。こうした住宅事情と裏腹の関係にあるのか、外に出て、気軽に声をかわすのはゴチャゴチャした地域に限る。たとえば、建て替えも随分進んだが、終戦直後のバラックが、そのまま三〇数年を経過して今に至っている藤棚のある地区では、昭和十九年以來ずっと住んでいる女性老人が、わざわざ家から出てきて「ああ、ご苦労さま」「これリンゴの木、以前、実が成ったので新聞社の人が写真を撮りにきたの。でも、もう駄目、年とっちやっつたから」。猫が五匹も六匹も集ってくる。「黒が多くてね、好きだから野良が毎日遊びにくるの」と、昔の長屋風な感じだ。こちらの方がザックバランで

話もし易い。近隣の助け合いも多く見られるようだ。

さらに、家のなかには、こうした健康で元氣な老人とは別に「病弱」「寝たきり」「痴呆」等の障害に苦しむ人たちが多くいる。だが、それについては、新聞・テレビ等のマスコミを通じて多く報道されている。行政だって、まずそうした人たちへの対策で追われている。私たちが逢った街のなかでの「普通の老人」たちへの対応は、これから始まる処である。しかし、それでも皆、それなりに生き生きとして、ちよっと淋しく、時には辛らつな言葉を返し、キラリと光る長い人生での知見を、初めて逢った見知らぬ者にも教えてくれた。勿論、その人たちの家族との関係や生活歴、悩み、葛藤など心の奥底まで知ることはできないが、みんな心優しい現役の生活者だったことは忘れられない。

二二世紀元年の西暦二〇〇〇年には、今、働き盛りの私たちが、こうした高齢者への仲間入りをする。その頃、この横浜は、どのように変っているのだろうか。良くバラ色の将来を描く未来学者でさえ「活力を失った灰色の高齡化社会」をシナリオのひとつに挙げている人がいる。願わくば、そうした影の部分よりも明るい光の分野を見出して「落ち着きと潤いのある心優しい社会」になつて欲しいと思う。

と思う。そのためには、まだいくつものハードルを越えねばなるまい。ともかく、だれもができる小さなことから始めてみよう。たとえば、今回のように、たまには街を「ゆっくり歩く」ことからでも良いのだ。そうすれば、きっと高齡化の問題は、明日のことではなく、今日の自分の問題であることに気付くだろう。

さらには、お役所内部の「老人福祉」といった狭い枠組みの問題ではないことに気が付く筈だ。そして、そうした視野を「家族」「隣人」「地域」「職域」「社会」「自然」へと広げれば、現在の忙しい生活リズムとは違つた落ち着きと潤いのある生活サイクルを、必ず見出せると思うのだがどうであろうか。

四——横浜の高齡化はどのように進むか

それでは、全市的にみた横浜の高齡化の状況は、今どのへんに位置づけられるのか。また、今後の動向はどのようになるのか、少しマクロ的な視野から考えてみよう。

たとえば、世界の大都市、ニューヨーク、ロンドン、パリ、モスクワ、東京、横浜と並べて、東京、横浜のどこが他の都市と違うのか、ここで、確実に答えられることが一つある。それは、現在の日

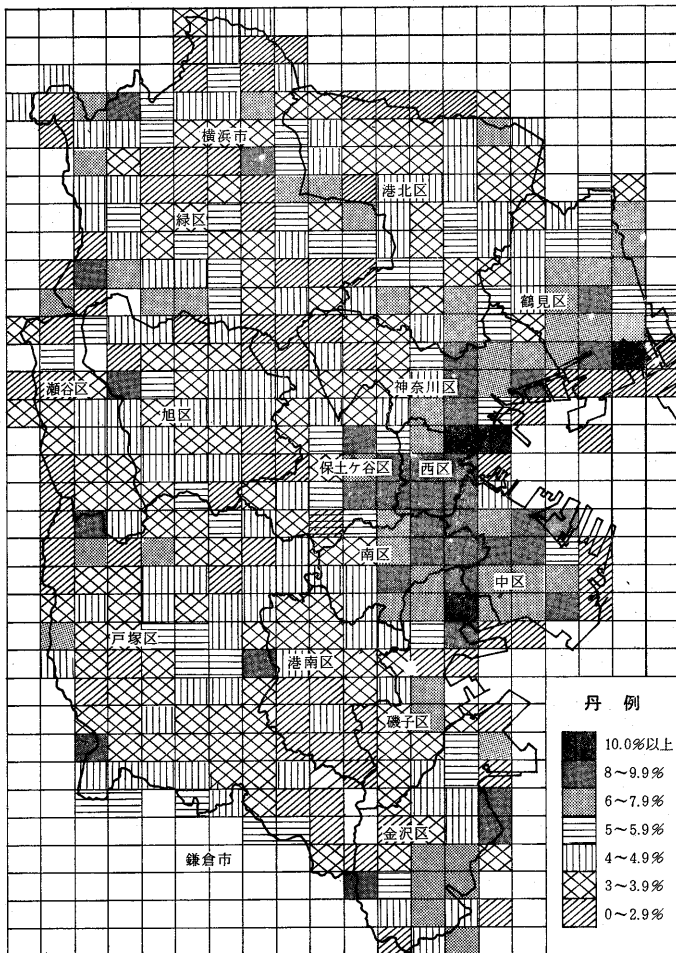
本の大都市、とりわけ東京圏にあるこの両都市の特徴は、世界の大都市のなかでも若い都市だということである。この若いこと、つまり、働き盛りの生産年齢人口の多いことが、これまでの都市の活力を支え、また、一九六〇〜七〇年代には、人口の集中に伴なつて、住宅や土地問題をはじめとする幾多の都市問題を生起させつつ、あの急激な経済の高度成長を実現させてきた。では、この若い状態がいつまで続くかといえば、それは昭和七十五年（冒頭で述べた西暦二〇〇〇年）、ちよつと二二世紀の始めに一四・五%の高齡都市となる。そこでやつと今日のヨーロッパ諸国の状態と同じになるわけだ。国内的にみても、私たちが住んでいる首都圏は、現在、まだとても若い都市だ。首都圏全体の高齡化率が今六%位なので、この數値を全国平均で考えれば、ほぼ昭和三〇年代の終り頃の状況ではないかと思われる。だから、高齡化、高齡化とはいっても、実感では横浜だって、まだ「若者の町ヨコハマ」といったイメージが強い。

だが、この間、日本の平均寿命は年々上昇し、世界で一、二位を争う「長寿国」となった。また、戦後一貫して進んだ、子供を少なく生み、丈夫に育て、高齡まで生きるといふ「少産少死」の傾向も強まった。そして、八〇年代を迎え

表一 横浜市別老年人口比率（単位：%）

	昭和55年	昭和65年	昭和75年
全市	6.1	9.2	14.1
臨海部			
鶴見区	7.3	11.3	16.0
神奈川区	7.5	11.6	17.0
西区	10.4	16.4	23.7
中区	8.8	14.5	23.2
磯子区	6.3	9.4	14.8
中間部			
南区	8.2	13.0	19.3
港南区	4.3	6.9	12.3
保土ヶ谷区	6.4	9.8	15.5
金沢区	6.7	9.1	12.8
港北区	5.7	8.5	12.4
周辺部			
旭区	4.9	8.1	13.9
緑区	4.3	6.3	10.0
戸塚区	4.7	7.3	12.1
瀬谷区	4.9	7.9	13.0

図一 昭和50年国勢調査による横浜市高齢化率メッシュ・マップ



て、経済の低成長期と共に、かつての生産年齢層の多くが、そのまま底上げされ、高齢者予備軍としての席を占めるようになってきた。つまり、教科書などによく見られる年齢別人口構成の図が、富士山型から茶筒型に移行しつつあるわけだ。こうした都市部での人口構造の変動により、この人たちの老後の生活全般に関する問題や、高齢化に伴う諸対策が、否応なく自治体の、正確にいえば大都市での避けられない政策課題として俎上にのせられてきた。これが、自治体の高齢化に対する最近の一般的な見解だ。

横浜の場合も同様に、市の総合計画「よこはま二一世紀プラン」（昭和五十六〜七十五年度）では、昭和七十五年の六五歳以上老年人口を四九万二千人と推計し、全人口に占める割合が一五%にまで高まると予測する。そうならばもう、文字通り完全な「高齢社会」の到来だ。この段階で、横浜は全国の平均と肩を並べ、その後、さらに高齢化が進んで、世界に類をみない高齢都市に突入するといふ見通しである。こうした予測が、横浜

市の高齢化に関する一般的な側面で、現在六・五%の高齢化率が二一世紀で一五%、ピーク時には二〇%といった具合だ。それ故、この長期計画では、横浜の高齢化への移行過程を予想し、それへの対策を最も重要な課題として挙げている。

しかし、これは、あくまでも市全体の平均的な推移をみたものであって、横浜市全域の高齢化が、あたかも順番に色が変わるように、一律に変わっていくと考えるのは大きな間違いである。すでに第二節の事例でみたように、市の中心部では、高齢化はかなり進行しており、また、ほかでも高齢化がある程度進行している地域と、まだ子供や若年層の多い地域があるのは当然だ。そこで、昭和五十五年の「横浜市高齢化動向予測調査」では、市内部の高齢化の地域差について検討し、そこから、高齢化に対する新しい視点と対策上の問題を考えてみた。結果だけを要約すると、つぎのことがいえ

る(表1・図1参照)。

まず、西・中・南など都心の三区では、もうすでに全国平均や東京圏全体の平均を上廻る超高齢化地域に突入しており、逆に、緑区などの周辺区では、まだ相当期間にわたって低い高齢化率のまま移行するという構造が示され、特徴としては、都心臨海部から内陸部へ向けて高齢化が進む。そして、横浜は、全体として異なった高齢化の進度を内部にもつ「小宇宙」であることがわかった。このことは、今後の高齢化対策や政策展開を考える上で、非常に重要な側面である。つまり、二一世紀の「高齢社会」に向けて、その移行期間中に、ただ手をこまねいて時期を待つのではなく、先に高齢化の進んだ地域でいくつかの施策を試み、有効な手だてがあれば、それを、つぎにくる若い地域への対策や予防につなげるといった連続的な政策展開が求められる。いわば、移行期間を準備・誘導過程と考えるべきだ。

早い段階で高齢化が進むと思われる。そうすると、「現代の産屋」的な役割をもつ団地の構造や付属施設、たとえば砂場とか保育園、そして小学校などの諸施設は、全く陳腐なものとなり、老人のための施設が新たに必要となってくるであろう。さらに、周囲の都市環境を見廻しても、これまでの横浜の街づくりが、比較的「若者むき」につくられてきただけに、たとえば、強い脚と身軽な行動、よく見える目と変化に対する柔軟性が都心生活をおくるために公然と、あるいは暗黙の前提となっていたように見受けられる。これらのことは、今後の都心整備や街づくりを考える上で、どうしても必要な視点になるであろうと思われる。

五 時間資産の活用と健康上の問題

横浜では、この数年間、高齢化に向けたさまざまな調査業務と共に老人諸施策を検討する数々の研究会を進めてきた。調査の目的は、主として高齢化の動向予測と、高齢者の暮らしや生活の実態を知るためのもので、それらの概要は、表2に示す通りである。結果の詳細については、年度毎に報告書が出されているので、必要な方はそれらを参照されたい。なかでも、一日二四時間の高齢者の行動をいつ、どこで、だれと何をしたかの五項目に分類し、分刻みで記録した「生活時間」調査は、横浜市六〇歳以上の人びとの暮らしについて広範なデータを提供した。この報告書の「はじめに」でも触れられているように、かつて平均寿命が一般的に短かった時代には、長生きすること自体祝福され、また、人生のひとつの成功でもあった。しかし、平均寿命が七〇歳を越える今日、単に長く生きることだけでは、必ずしも成功した老後を送ったとはいえない。長生きすることは、それだけ長い持ち時間のあることであるが、これを充分有効に使うことが出来るか否かは、大きなカギとなる。

表一 2 過去3年間の横浜市高齢化関係調査及び研究会活動の概要

	昭和55年度	昭和56年度	昭和57年度
高齢化社会予測調査	報告書：高齢化社会への対応を求めて 1 中高年市民の生活と意識調査 (一般世帯・団地世帯、45歳以上 2,000人) 2 個別ケーススタディ調査 { 高齢化の動向予測 老後の所得保障 家族と地域の役割 女性の老後問題 同世代調査など 3 高齢者の生活時間調査実査及び施設入居者の生活実態調査 (研究会会長 荊木 裕氏)	報告書：活力ある高齢化社会をめざして 高齢者のくらしと生活時間 (2分冊) 1 市民生活の変化と意識に関する調査 (20歳以上 1,200人) 2 老人の在宅ニーズをめぐる調査 3 老人医療にみる受療動向調査 4 老人にとっての都心機能調査 5 高齢者のくらしと生活時間調査 (詳細分析と全国比較) (研究会会長 荊木 裕氏)	報告書：痴呆等老人対策と新しい在宅福祉の方向 横浜市在宅老人健康実態調査報告書(2分冊) 1 横浜市65歳以上老人の健康実態調査 (65歳以上 2,500人) 2 痴呆等老人実態調査(237人) ……出現率4.8% 約8,800人 3 在宅サービス供給システム研究調査 { 福祉事務所・保健所の連携及び新たな供給組織の検討並びに福祉資源マップの作成 (研究会会長 那須宗一氏)
	横濱市老人問題研究会 学識経験者中心の研究会で審議し、その結果を提言。「横濱市老人問題研究会報告」 1 在孝福祉サービスの推進 2 ぼけ等老人対策の推進 3 健康老人に対する施策の拡充 4 福祉事務所機能の見直し (委員会会長 津田文吾氏)	報告書：横濱市福祉サービス供給組織研究委員会中間報告 (57、58年度事業) 1 福祉サービス供給組織の在り方 2 他都市社会福祉事業団等調査 (委員会委員長 三浦文夫氏)	

平日の自由時間が四時間四六分増えるが、この増加時間の大部分はテレビ視聴時間の増加となっている。しかも、仕事関係者との同席時間は大幅に減少し、労働を退いた人の配偶者への時間の集中が注目される。勤労男性の場合、退職後、妻以外の家族や近所の人とは疎遠で、地域へのとけこみはかなり難しそうだ。また、男性有職者の日曜は、無職者に比べて遅く起き、早く寝るが、月曜にはその逆で、早く起きて遅く寝る傾向にある。そして、無職者の特徴は、有職者にくらべて日曜と月曜の生活時間の差が少なく、定年経験者のそれは、まさに「毎日が日曜日」という感じだ(図2参照)。

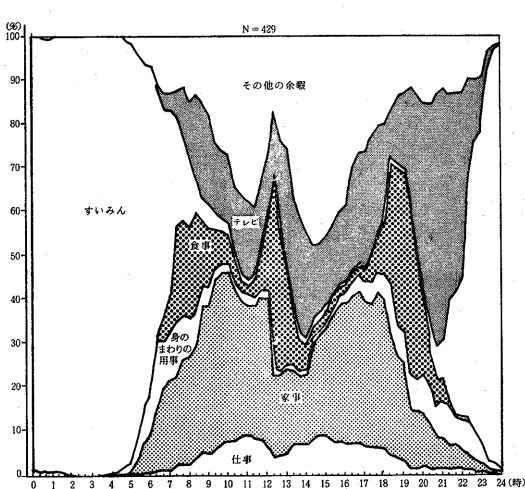
この時間使用の面から強い老人、弱い老人の特徴をみると、その違いは主に「労働」という行動時間の差として現われてくる。全体として強い老人の方が「労働時間」は長く、そのトレードオフとして「自由時間」が短くなっている。つまり、強い老人というのは、仕事もち、家族との接触を多くもっている老人として生活時間的にはみることができ、逆に、弱い老人のなかには「一人暮らし」に代表されるような「孤独」な老人の生活もみられる。だが、一人暮らしの人でも、自分の健康に不安をもつ人の方が「自信あり」と答えた人より、他者との接触機会を多くもっているようだ。このことは、その人たちがなにを求めているのかを知る、ひとつの手掛りになると思われる。

最後に、余暇活動において、日頃の「近所づきあいの程度」「知人・友人との交際」「地域活動」の三つの行動を軸に、そこからの離脱の状況を見ると、①三つの活動ともやめてしまった人が約二割、②三つとも行なって最も離脱の遅れた活動的な人が一六%③一つ位はやっている中間段階の人が六割近く、という結果であった。このうち、①の三つとも離脱した人は、一日の生活において長い自由時間をもちつつも、その活動は限定されており、空間的にも自宅を中心とした狭い範囲内にある。諸個人の満足度とは別にして、「テレビを見ながら孫の相手をして一年間を暮らす」といった静かな生活像が浮かんでくるようだ。

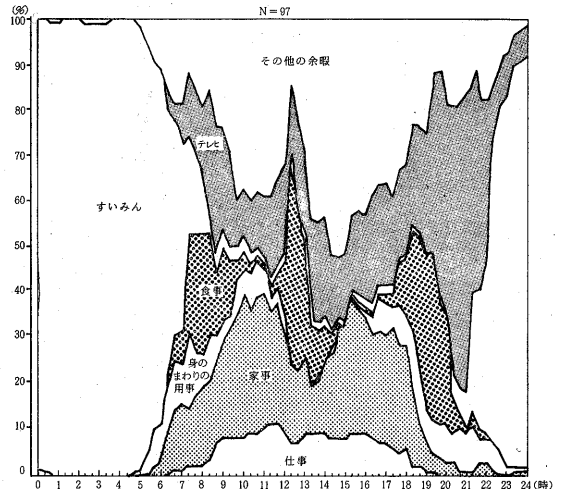
一方、これら一連の調査のしめくりともいえる五十七年度調査では、その主眼を予測から対策へと移し、当面のテーマを高齢者の健康問題に絞って、福祉・医療サービスの有機的な連携をはかるための手法をさぐった。とくに現在、社会的にも大きな問題となっている痴呆等老人の実態と出現率の把握。並びにその対策をはじめ、増加する高齢人口の健康確保の問題、さらには「病弱」「寝たきり」「痴呆」等のいわゆる日常生活を送る上で障害をもつ老人や家族が、福祉諸サービスを在宅のまま地域で受けられるような体制を整備し、あわせて今後、その予防的な側面を強めていくことは、行政として緊急度の高い課題であった。

西、保土ヶ谷、旭三区を合計した六五歳以上老

図一2の1 高齢者のタイミング(日曜日)



図一2の2 無職男性のタイミング(月曜日)



人の高齢化率が、ちょうど横浜市全体の平均値とほぼ同様になることに着目し、この三区を横浜市のミニモデルと設定して、アンケート方式による二、五〇〇名の「健康実態調査」を実施した。この基礎調査で専門的な診断の必要があると認められた老人には、医師と保健婦がペアで自宅を訪問し、丹念に診察した。その結果が、専門調査の形で報告されている。従って、これを横浜全体の傾向としてとらえても、それ程間違いない内容だと思ふ。

六五歳以上老人の平均年齢は七二・五歳。世帯構成では平均家族員数が三・七人。完全な三世帯同居世帯は一七・五%で、逆に、一人暮らし世帯が七・四%、老夫婦のみが二三・七%を占め、このよくな世帯がじわじわと増えている。自分の健康に自信のある人四三・二%、自信のない人二三・八%、自信ないが悪くはない人が三一・六%の割合。バスや電車を使って、一人でも自由に外出できる程元気な人が八割強、また、庭先や家のまわり位という人が一四・一%、寝たり起きたりの人が二・八%、全くの寝たきり状態の人は一・六%という結果であった。

そのうち、痴呆ありと認められた人が全体の四・八%、全市では八、八〇〇人前後になるといふ推測だ。同じ手法で調

べた東京の四・六%の数値とほぼ同じだが、医師の判断による痴呆の程度別割合では、横浜の方が症状の軽い人が多く、身近な家族すら間違えるといった高度のぼけの割合は、東京の半分に満たない。また、医師が見て全面的な介護が必要だという人は、全体の三割弱だが、その介護者の八割以上を女性が占め、九割強の人たちが、家族だけで介護しているのが現況。

こうした状況のなかで、昭和五十八年度の事業では、介護読本の作成や、専門的な診断、判定・相談機関網の整備等が検討され始めた。さらに、新たな「福祉サービシ供給組織」についても、その具体的な構想がまとめられつつある。いずれも、調査の段階から、施策化を目指した実際の対策へと踏み出したわけだ。市民の利便性からみて、この福祉と医療の連携への道は、古くからいわれられてきたことであるが、それは同時にまた、高齢化に向けて避けられない急務の課題となっている。

六 情性的な日常性にひとつの転機を

横浜ではこのように、昭和五十五年から、さまざまな調査を行ってきた。それらの成果は、勿論、市の予算編成方針

の冒頭や、総合計画のなかに「高齢化社会に備えて」という文言や施策が多く見られるので、それなりに主旨は生かされていると思う。しかし、これら大掛りな調査の対象者として残り少ない人生の貴重な時間をさいて協力された市民は、もう一人をゆうに超えているだろう。な

かには、すでに高齢のため、その結果をまたず、老衰や病気で亡くなられた方も多い。また、「病氣」「孤独」「経済的な不安」など現実の悩みを抱え、至急行政の手助けを求めている人々からみれば、もうひとつ寂然としない部分も多いと思われる。そこで、これら調査を企画し、実施してきた者としては、ここで、その後の行政対応に触れておくのは当然の義務でもあらう。

これまでの調査で明らかにされたことは、高齢化の進行が、福祉・医療はもとより、雇用・就労、生涯教育、文化、街づくり等の行政全体に大きな変化をもたらし、それへの対策は、行政の力だけではどうしても乗り切ることができず、市民との協力関係を前提にして、学際的・局際的な検討が必要であるという結果であった。つまり、これは二一世紀に向けた今後の市政全般にかかわる問題であり、新しい社会像、たとえば若者と生産者中心の社会からの脱皮や新たな市民生活のあり方をさぐるものが、横浜を、ど

のような「高齢社会」に軟着陸させるのか、といったことに対する重要なカギとなることが提起された。

だが、これらの作業は、今の処、行政内部でも、狭い意味での老人対策として位置付けられ、いずれも民生・衛生両局の業務を中心に考えられている。従って、高齢化に対する行政全体の取り組みとして、街づくりを担当する都市計画局とか、教育面からの担当部局との間で、まだ基本的な視点統一をはかれないのが実情だ。そのため横浜市では、担当助役を中心に、五十八年度からの二カ年計画で、高齢化に向けた行政内部の視点の統一や、有機的な対応策の検討を目指し、関連局長級を委員とする「高齢化社会対策研究会」を発足させた。研究会のメンバーには、企画財政、総務、市民、民生、衛生、経済、都市計画の各局長と教育長、それに区長代表といった関係部局が参集している。

このメンバーを中心に月一回位の割合で会合を開き、過去三カ年間の調査をふまえて、高齢化社会に向けた今後の福祉、保健医療、就労、教育、文化などソフト面での各種行政施策の連携方法や、街づくりなどハード面からの検討、さらには市民と行政の協力関係のあり方等を協議し、行政内部の視点統一をはかるゆるやかな連携の場を設けた。始まったば

表一 3 高齢化社会へ向けての行政課題

項目	内容	関連局
1 都市計画的側面からの検討	○高齢化社会の進行に対応する街づくりのあり方の検討 ○都心再開発、道路、公園、住宅等の具体的整備手法の検討 ○学校その他の公共施設の活用方法の検討	都市計画局他
2 高齢者の健康づくり 社会体育の充実	○高齢者の健康の保持増進と関連施策の有機的連携	教育委員会 市民局、衛生局 民生局他
3 生涯教育の充実 文化活動の有機的連携	○高齢化、情報化、高学歴化の進行に対応する生涯教育の充実及び各種文化施設・文化活動の有機的連携方法の検討	教育委員会 市民局他
4 児童・青少年問題への対応	○急務の課題であり早期の対応が必要であるが、高齢化の進行が子どもをとりまく諸環境に与える影響、世代間扶養、高齢者と子どもの共生などの問題を踏まえての対応が必要	教育委員会 市民局 民生局
5 婦人問題への対応 高齢者就業とワークシェアリング	○家庭での老人の介護、一人暮らし高齢女性の増加、女性の社会参加など高齢化が婦人問題へ与える諸影響への対応 ○高齢者の就労確保と婦人、若年雇用との調整	市民局 経済局 民生局
6 福祉保健医療の連携と情報・サービスの収集・提供機能の強化	○増大、多様化する福祉・保健医療ニーズへ迅速、的確な対応を行うための情報の統合とサービスの集中方法の検討	衛生局 民生局
7 退職前準備教育への対応 行政組織の活性化	○企業、労組等による退職前準備教育推進のための条件整備 ○市役所組織の活性化のための組織的・人事的対応（市職員の高齢化対策及びモラルアップ）並びに市職員の退職前準備教育等	総務局 市民局 経済局
8 総合的行政対応並びに研究開発の体制整備	○高齢化社会への行政対応を総合的に行うための「高齢化社会対策室」の設置の検討 ○市民生活の構造変化に対応する新たな需要の把握等のための「高齢化社会研究開発機構」の設置の検討	企画財政局 総務局

かりなので、まだこれからどのように進展させるか模索の段階でもあるが、とりあえず検討すべき事項を表3に掲げる八つの項目にまとめ、今後、これらの課題ごとの研究や事業の優先順位に目処をつけていく予定だ。

いずれにせよ、これらの問題を多くの職員の方々に知ってもらった上で、それぞれ共同のテーブルにつき、共に討議するなかから、自治体における高齢化社会対策を考え、役所はなにをすべきか、また、なにをしてはいけないかといった問題を、もつとツメていかねばならないと思う。それ故にこそ、庁内で多くの議論が湧き起ることを期待したい。

ともあれ、過去三年間に行なわれた横浜調査の特徴は、ただ単に調査業務を外部委員に

委嘱するのではなく、それぞれの研究会に、行政の第一線で働く現場職員の方々に多く参加してもらい、現場の生情報をもちよりながら、調査の対象やその手法を決定していったことにある。現実の行政のなかでは、そのような動きは、あまり歓迎されることではないかも知れない。だが、こうした手法を採用したのは、なによりも、高齢化への対策が、各分野にわたる専門家・研究者との学際的な協力と、市民の積極的な参加や現場職員との協働の場を拡げることによって、初めて従来の役所のワクを越えた局際的な取り組み方を検討していけるのではないかと考えたからである。全てが成功したとはいえないが、そうすることによって、職員が多くが、それぞれの仕事の進め方において、外部委員や市民の方々と同じ視点を大切にするといった基盤を開拓したいと思ったからである。従って、ここで行なわれた作業は、外部委員をはじめとする市民と横浜市民局との協同作品であり、その成果をもって今後の行政のあり方を考え、高齢化への対策を進めていくといった実践的な視点を大切にしたいかった。

しかしながら、この仕事を実際に担当して、痛切に感じたのは、高齢化対策を現在たまたま民生局で所管しているが、これはあまりにも課題が大きく、範囲も広いので、当然未知な分野も多く、また、旧来の役所のタテ割りの発想では、どうにも対処できないということであった。さらには、そうした役所的な風土のなかで、将来に向けた長期的な政策展開を期待するなど、とても無理な注文であるとも感じた。

そのような折にいつも想い出されるのは、もう亡くなられたが、五十五年調査に参加した市役所のあるOB（当時六七歳）が入院先の病院で点滴を受けつつ、私たちへの励ましのために書いた原稿の一節である。「高齢化社会に向って取り組むべき分野は、私たちの生活にとつてきわめて重要な部分である。しかし、この問題と真剣に取り組もうという役所の職員たちが、職場の惰性的な日常性を克服するための転機をつかむこと、それのみが私たちを納得させる老人行政の本当の出発点ではないか」という内容だった。

このような文章を唐突に持ち出したのは、ほかでもない、個人であれ組織であれ、内側から自己を変えようという力のないとき、それは「若くても必ず古い」し、未来社会の創造には結びつかないと思うからだ。そうしたことを根底に、今後の問題を考えて行かねばなるまい。

△民生局総務部企画課主査▽